

一九世紀ヨーロッパにおけるナショナリズムとインターナショナルナリズム

——ミシュレの『北方の民主主義伝説』と
ゲルツェンの『ロシア民族と社会主義』を
めぐって——

藤 本 治

一八四八年は一九世紀ヨーロッパ史のもっともドラマティックな、もっとも意義深い転機の一つを形成している。フランスの二月革命はブルジョワジーの反革命の前に敗北し、東ヨーロッパと南ヨーロッパの、政治的自由と民族的解放とを要求する諸革命はいずれも国際的反抗勢力によって無惨に鎮圧された。しかし、歴史の主體的な手としてのプロレタリアートが社会の運命を決するはげしいたまたかのなかにはじめてその姿を現わしたのはこの二月革命においてであったし、諸国民の民族的解放が単独の、孤立したたかひによって獲得されるものではなく、必然的にプロレタリアートの社会革命と結びつかざるを得ないということがはじめて明らかとなったのもこの一八四八年の諸革命においてであった。パリの労働者はこの革命の尖兵であり、反動と反革命の竜騎兵の役割を演じたのはツァー

リのロシアであった。革命の陣営にはプロレタリアートと被抑圧諸国民が立っており、反革命の側ではブルジョワジーの権力と封建的反抗勢力が野合していた。もっとも基本的なこの二重の対立関係を抜きにしては、一九世紀のヨーロッパ史を理解することは不可能であろう。したがって、一方ではプロレタリアートの社会革命と被抑圧諸国民の民族解放運動との結びつきの問題、他方では西ヨーロッパのブルジョワ的権力とプロイセン、オーストリアおよびロシアのおくれた封建的な反抗勢力との野合の問題を究明することが、一九世紀ヨーロッパ史研究のもっとも重要な課題の一つとなるであろう。まさしくこの点で一八四八年の諸革命の歴史は、一九世紀ヨーロッパ史理解の鍵を提供しているように思われる。ミシュレとゲルツェンという二人の思想家をめぐって、思想におけるナショナルナリズムとインターナショナルナリズムの関連と構造を考察しようとする小論は、以上の課題にたいして、思想史の側からする研究の一つの準備作業にはかならない。

フロベールの傑作『感情教育』は二月革命の市民的叙事詩とも称し得べきものであるが、この小説のなかで、革命に参加したパリ労働者の一典型、デュサルディエは次のように叫んでいる。

「いま、やつらはおれたちの共和国を殺そうとしているんだ、ちようどローマ共和国を殺しちゃったようにさ。それにあのかわいそうなヴェネチア、かわいそうなポーランド、かわい

そんなハンガリー！なんていまいましいこった。手はじめにやつらはまず自由の樹を切り倒した。つぎに選挙権を制限し、クラブを閉鎖し、検閲を復活し、教育を司祭どもに任してしまつた。やがて宗教裁判をおっぱじめるだろう。いやほんとにわかつたものじゃないさ。保守派の連中はコザック兵をやとつておれたちをやつつけようとしかねなかつたくらいなんだから。」

デュサルディエと同じくバリ労働者は、フランスにおける残酷な労働者断圧と東欧諸国の革命の抑圧との背後に、同じ一つの力、同じ反動の力が働らいていることを感じとつていた。だからこそかれらは、一八四八年五月一五日の示威運動において、「ポーランド万歳」という叫びをあげたのである。ツァーリの軍隊によって苛酷な鎮圧をうけたポーランドの愛国者たちへの援助を要求するこの叫びが、世界の歴史のなかではじめてブルジョワジーとプロレタリアートの公然たる闘争の幕が切つて落されたときの、プロレタリアートのうぶ声だったとも言ふことができる。かれらにとつては、まさしく「民衆はわれらのはらから、圧制者こそわれらの敵」であつた。

ミシュレはかれらの先頭に立つて民衆の國際的連帯を主張していた。すでに一八四七年一二月にかかれは、プロイセン王フレデリック・ヴィルヘルムに宛てて、叛乱を起したポーランド人の助命を要求する書簡を書き、また一八四八年四月にはポーランド亡命者擁護の書簡を書いている。かれはコレージュ・ド・フランスにおけるミツキエヴィチの盟友であつたばかりでなく、ポーランド民族のもつとも熱心な友であつた。ときどきは

民衆のラジカルな運動に先を越されることがあつたとしても、またのちにわれわれが見るであろうような一定の限界内においてではあつたけれども、ミシュレはその心情においてもその理論においても常に被抑圧諸国民の味方であつた。

革命によって成立した第二共和制の政府が急速に反動化し、その労働者にたいする敵意が国立仕事場の廃止というもつとも露骨な挑発となつて示されたとき、ついに労働者は六月二三日パリケードをききずいて蜂起したのであるが、政府によって血の海のなかへ投げこまれ、ここに社会革命としての二月革命は決定的に敗北した。こうして主導権を完全にブルジョワジーにうばわれた労働者は以後の反動化の過程では、「ブルジョワ連中のためにむざむざ死んでやるほど、おれたちも馬鹿じゃない！」とつぶやきながら、政治から背を向けて去つてしまふ。こうして、ミシュレがフランスと人類にかけていた美しい夢は、跡かたもなく打ち砕かれてしまった。しかも、反動への降伏を肯んじなかつたかれは、ボナパルトの権力掌握とともにコレージュ・ド・フランスの講壇からも国立文書館からも放逐され、いわば一種の国内亡命を余儀なくされる。

革命にかけた期待が大きかつただけに、この時期のミシュレの絶望は深く苦いものであつたにちがいないのであるが、民衆の子としての自覚に生きていたかれは長く絶望の底に沈湎することを自らに許すことはできなかつた。痛手から立ち直ろうとしたかれは、再び『フランス革命史』の研究と叙述に没頭すると同時に、革命の主体形成の基本的手段としての民衆教育の問

題に深く思いをひそめる。希望と勇気を取り返そうとするこの努力のなから生れてきた労作の一つが『北方の民主主義伝説』であった。

はじめ『民主主義の黄金伝説』として構想されたこの書物の目的は、ミシュレ自ら日記のなかで語っているように、近代ヨーロッパの魂（それはかれにとってはそのままフランスの魂であった）すなわち革命の精神を明確に形象化してそれを民衆の前に提示すること、それをおして革命の主体たるにふさわしい心情を民衆のなかに鼓吹することであった。しかしそのモニユメンタルな雄大な構想は部分的に実現されたにとどまり、われわれが手にし得るのは、一八五四年に『北方の民主主義伝説』に収録されたところの、「ポーランドとロシア——コシューシコー」、「ロシアの殉難者たち」および「ダニュープ諸州——ロゼッティ夫人（一八四八年）——」の三部作である。これは実証的な研究でもなければ理論による説得をめざしたものでもない。これは、被抑圧諸国民の苦しみにたいする同情によって鼓舞され、ロシアを元兇とする反動への憎しみを武器とするところの、かれの心臓から直接に躍りでた奔放な情熱的な雄弁である。

ミシュレは、ヨーロッパは一つであるという信念から出発する。「全ヨーロッパは、一つの人格にほかならない。ヨーロッパの各国民はそれぞれこの人格の一つの能力、一つの力、一つの活動である。」われわれはここで、かれのフランス革命史研究

の結論でもあり同時に同時代のフランスにたいする要請でもあったところの、あの「フランスは一つの人格にほかならない」というテーゼが、ヨーロッパにまで拡大されていることを確認しておこう。したがって、ここでいわれているヨーロッパは、理念的に拡大されたフランス、あるいはフランスの理念に指導されているヨーロッパにほかならないということになる。事実、この『民主主義伝説』のなかでも、ポーランドは北のフランス、ルーマニア（当時はトルコ領モルダヴィアおよびヴラキアの二州）は東南ヨーロッパのフランスと呼ばれているのである。かれによればポーランドやルーマニアは数百年の長い間、モンゴルやトルコやロシアの野蛮からヨーロッパ文化を守る前哨として英雄的にたたかってきた諸国民であり、いまかれらは西ヨーロッパ諸国民以上に西ヨーロッパの理念のためにたたかっているのである。とすれば、ポーランド人やルーマニア人の危機をミシュレが全ヨーロッパの危機として意識したことはけだし当然であったといわねばならない。そのさい二月革命の苦い幻滅がかれの危機意識の培養基として作用したことはいうまでもあるまい。

こうしてミシュレは、一八世紀以来数度にわたってロシア、オーストリア、プロイセンによって分割されながら、民族の解放と統一および政治的自由を求めての絶望的な、しかし不屈のたたかいを数十年の長きにわたってつづけてきた不幸な、しかし英雄的な国民、ポーランドへの深い大きな同情に心をつき動かされて、諸強国なかならずロシアの不正なポーランド支配に

たいして抗議する。「何たる奇怪なコントラスト！どの国民にもまして人間的なこの国民、ほかならぬこの国民が人間性の外に逐いだされているのだ。」そして、たしかにポーランドは国家という形式をこそうばわれてはいるけれども、しかしいま、いかなるときにもまして国民として生きている、とミシュレは主張する。

「わずたずに切り裂かれ、血を流し、声をうばわれ、脈搏もなく呼吸もやめてしまったかに見えるポーランドは、しかし生きていっているのだ……それどころか、ポーランドはかえって、いっそう強く生きていっているのだ。その四肢をうばわれて頭と心臓とに凝縮されたポーランドの全生命は、かえっていっそう鞏固な力強い生を得ているのだ。それだけではない。ポーランドは、ほかに生きている国民のいない北方で、生きている唯一の国民なのだ。」

これに反して「ロシアは生きていない。」何千万という人間を殺戮し、ポーランドに野蛮な専制を押しつけているロシアは、じつはその専制そのものとそこから生ずる精神的・道徳的頹廢とによって自己自身を抹殺し、野蛮状態に帰り、自ら国民としての生を否定している。ロシアは国民のない国家という怪物にほかならない。これがロシアにたいしてミシュレが投げつける断罪のことばである。

「世界にとっておそろしい現象、だがとりわけロシア自身にとっておそろしい現象。ロシアの理念はロシアのなかで衰弱してしまった。しかもロシアはヨーロッパの理念を獲得しなかつ

た。ロシアは家父長的權威という自己の夢を失なった。しかもロシアは、法、諸国民の母ともいふべきこの法を知らぬ。」

そして、一方ではポーランドにたいするあまりに深い同情、他方では当時の西ヨーロッパをおおっていたロシアについての無知と偏見、とりわけ神聖同盟の盟主、国際反動の首魁としてのロシアへの憎悪、これらがミシュレをして、ロシア人、ロシア国民をも十把一からげにして非難するという誤りを犯させることになった。かれは、ロシアというものは存在しない、ロシア人は人間ではない、かれらは道徳的分別をもっていない、とまで主張する。

「われわれは言いたい、かれら（ロシア人）には人間の本質的な属性——道徳性や善悪の意識が欠けているのだ、と。この意識、この理念こそが世界の基礎であるのに。この意識をもたぬ人間は、まだ偶然のなすがままに漂っている存在である。：

…真実と正義とはかれらにとってはなんの意味ももっていない。真実や正義についてかれらに語りかけて見たまえ。かれらは押し黙ったまま微笑んでいて、諸君が何を言おうとしているのか理解できないのだ。…正義はたんにあらゆる社会の保証であるのみならず、社会の現実、社会の基礎、その実体をなしている。正義が無視されている社会は、したがって、見せかけの、現実性のない、虚偽の、空虚な社会である。」

以上の若干の引用文からも明瞭にうかがわれるように、ミシュレはロシアと東ヨーロッパ諸国民の対立のなかに、東洋的専制主義と西ヨーロッパ的自由と正義の理念の対立を見ている

のである。ロシアは、モンゴルの野蛮な好戦的精神と東洋的專制主義の魂に、プロイセンの官僚制と軍隊組織という外被を被った怪物である。それにたいしてポーランドは自由の殉教者である。そしていまこのポーランドによって代表されているヨーロッパは本来一つである。それは一つの調和的な有機体であり一つの堅琴であって、各国民はそれぞれその一つの弦を代表する。したがってその一つでも取り去るならば全体の調和は不可能となり、ヨーロッパ全体が衰頹することになるであろう。そのためにヨーロッパが死滅することはないとしても、しかしヨーロッパは肺をこわされ脳の一片を切り取られた人間のように不具廢疾の身となるであろう。であるからポーランドを、ルーマニアを救わねばならぬ。それはとりもなおさずヨーロッパを、その自由を、その文化を、いや人間そのものを救うことを意味するのだ。これが、『北方の民主主義伝説』におけるミシュレのバテティックな訴えであった。そしてこの書物はまさしく、かれの「ロシアにたいする宣戦布告」であった。われわれとしては、かれの世界像が常にフランスから出てフランスに帰っていること、そしてかれが世界を、民族を、文化を、そして人間そのものをも常にヨーロッパの基準によって評価していること、これがかれのインターナショナルイズムの限界をなしていることを、指摘しておかねばならない。

ミシュレのこの書物の第一部、コシューニコの伝説は、はじめ一八五一年八月から雑誌《L'Evenement》に連載されたの

であるが、この文章を熱心に、だがきわめて複雑な気持で読んでいた一人のロシア人がいた。ゲルツェンである。

ゲルツェンは、野蛮な専制主義下の祖国ロシアに絶望して、一八四七年一月パリに亡命してきていた。一八四〇年代のロシアの西欧派の人びとにとってそうであったように、パリはかれにとってもフランス革命の偉大な諸事件や諸闘争、偉大な思想と結びついた約束の地、革命の聖地であった。やがて二月革命が勃発した。かれは社会主義の理想がこの革命によって実現されるのを期待して、感激の涙を流しながら革命を熱狂的に歓迎した。だがかれが目撃したのは革命の勝利ではなく、その失敗であった。革命の挫折、反革命の勝利は、ミシュレを打ちのめしたと同様に、ゲルツェンを再び絶望の底に投げこんだ。かれは革命の敗北のなかに西ヨーロッパの死、「現代社会の崩壊」を見た。そして西ヨーロッパに絶望したかれは、一八五〇年頃から、「祖国への精神的復讐」をとげることによって、この絶望から脱出しようとして苦悩する。ちょうどこの頃にかれはミシュレの『伝説』を読んだのである。

かれは、ミシュレの一種の文化的中華意識にもとづく世界像、とりわけそのロシア像にたいして抗議するために、「ロシア民族と社会主義」と題するミシュレへの公開状を書きあげる。かれはミシュレに大きな敬意を表しつつも、二つの側面からミシュレに抗議を提出する。

第一にゲルツェンは、ミシュレがツァーリのロシアと人民のロシア、ロシア政府とロシア民族とを混同し、ロシア民族その

ものをも非難し断罪していることにたいして、ロシアの民衆を代表して抗議する。ポーランドへの愛と同情がミシュレのロシアにたいする憎悪と軽蔑とをかきたてたのだということを理解しつつもゲルツェンは、「普通選挙と市民の銃剣によって武装された」ほかならぬフランスが、ワルシャワからローマにかけての反動的封建的秩序の回復に同意したではないかと皮肉に指摘しつつ、次のように主張する。

「ロシア民族は存在している。ロシア民族は生きている。年老いてさえない。むしろ非常に若々しい。人は若くして、つまり生きたと言える前に死ぬこともある。これはあり得ることだ。しかし正常なことではない。ロシア民族の過去は暗い。その現在は恐ろしい。けれども未来への権利はやはりもっているのだ。ロシア民族はその現状を信じてはいない。この民族が所有するものは僅かである。だからこそいっそう大胆に、いっそう多くを期待しているのだ。ロシア民族にとってもっとも困難な時期は終りに近づきつつある。」

第二にゲルツェンは、ミシュレのフランス中心主義的な歴史の見かた、あるいはヨーロッパ史と人類史という信仰にたいして、アンチテーゼを提出する。かれは、「ヨーロッパ世界の運命においてフランスが演じている巨大な役割」は充分に評価する。しかしかれは、フランスが歴史の進展の必要不可欠な絶対的条件だというミシュレの意見を容認することはできないのである。かれはまず、フランスと西ヨーロッパは、かつての進歩的な栄光ある役割を終えて破滅に瀕しつつあると批判し、つい

でかかる西ヨーロッパにたいして、ロシアを中心としポーランドをふくむスラヴ世界の統一性とその未来の権利とを主張する。

ゲルツェンの眼からすれば、一七八九年のフランスとヨーロッパはもはや古い過去の世界であり、新しいヨーロッパはまだ生れてはいないのである。その証拠は二月革命の敗北と反動の勝利である。

「ヨーロッパは恐るべき破局に近づきつつある……政治的、宗教的革命はその無力な重荷の下に力つきはてている。……革命は王座と祭壇からその幻想的な威光を削ぎとったが、自由を実現しはしなかった。革命は人びとの心のなかに意欲をかきたてたが、それを満足させる手段は何一つ与えなかった。」

ヨーロッパは、あの決定的なたたかひの前夜の陰鬱な重苦しい暗闇のなかに沈んでいる。……法も真実も、自由の見せかけさえもはやない。いたるところ世俗的、非宗教的な宗教裁判が絶対的支配をほしきままにし、法律は戒嚴令下の軍律によって代わられてしまった。ただ一つの精神力がすべてを司り、命令を下し、指揮をとっている。すなわち恐怖である。」

すでに述べたように、ミシュレはロシアでは真実と正義は意味をもたないといつて非難したが、ゲルツェンは、変化の激しい革命的な時代にあつては、真実と正義という二つのことばは、その絶対的な、万人を納得させる同一の意義を失なっている、と答える。「ふるいヨーロッパの正義と真実とは、生れつつあるヨーロッパにとっては虚偽と不正である。」だからこそ

ゲルツェンは、西ヨーロッパ諸国民の過去は非常に教訓的ではあるが、かれらの歴史の遺言執行人の役目を果すことはロシア人の義務ではないと考えるのである。かれはヨーロッパの価値基準ではかることをゆるさないと、ロシアおよびスラヴ世界の独自の立場、歴史における独自の権利、独自の未来を主張する。ヨーロッパが統一を主張するならば、スラヴ世界もまた統一への権利を主張することができなくてはならない。たとえはロシア人とポーランド人は、たんに同一の種属からなっているだけではなく、共通の苦難の歴史、共通の敵ツァーリの専制主義のくびきの下で自由のための共通のたたかいのなかでしっかりと結びついているのだ。こうしてかれはミシュレに反対してポーランドをスラヴ世界のなかに奪いかえずるのである。

「まずロシアとポーランドとをたがいに結びつけ、ついでこの両国民を全スラヴ世界に結びつけている連帯性は、もはや否認することはできない。この連帯性はこの上なく明瞭である。それだけではない。ロシアなくしてはスラヴ世界には未来はない。ロシアなくしては、スラヴ世界はくだけ散り、流産し、ゲルマン的要素によって呑みこまれてしまうであろう。それはオーストリア的なものとなって自己自身であることをやめるであろう。ところで、スラヴ世界の使命、その運命がそうなるならば信じない。」

ところでゲルツェンがこの手紙を公表する前に、ミシュレはゲルツェンの著書『ロシアにおける革命思想の発達』を読み、

自己のロシア認識の誤り、とりわけロシアの民衆と知識人とにたいする、ロシアの思想と文学とにたいする無知と偏見とを反省した。かれはコシュニシコの伝説の最後の章においてロシア民衆への同情と、デカブリストたちやプーシキンや、チャダーエフ、ベリンスキー、ゲルツェン、バクーニンへの深い敬意を表明した。かれは当時牢獄に投ぜられていたバクーニンに呼びかけてこう書いている。「あゝ！ 寛い心、高貴な性情のもち主であるあなた、ポーランドとフランスの敬愛すべき友よ、あなたの愛する国にたいしてきびしいことばの数々を語った私を、どうか許してほしい」と。ゲルツェンを読んだことはミシュレにとっては、まさしく一つの衝撃、一つの閃光であった。そしてかれは、公式のロシアとはちがうもう一つのロシアの顔を知ったのである。

ゲルツェンもまた、ミシュレの誠実な態度に心を動かされて、こう書いている。

「ここまで書いたとき、わたしはあなたの伝説の最後の部分をうけとった。それを読んだとき、わたしはすぐにわたしの文章を火のなかに投げこみたいと思った。あなたのように気高く誠実な心にとつては、無視されてきたロシア民族のために外部から異議申立の審判が下されるのを待つ必要はなかったのである。あなたの同情と愛にみちた魂のほうが、冷酷な裁判官としての、殉難のポーランド民族のための復讐者としてのあなたの引き受けた役割に打ち勝ったのである。あなたは矛盾におちいった。しかしこのような矛盾は崇高な矛盾である。」

こうして、フランスとロシアの二人の民主主義の戦士は、共通のたたかいと民衆への共通の愛のために和解し、友情の手をさしのべあった。

しかしながら、『北方の民主主義伝説』と『ロシア民族と社会主義』とに端的に示されている二人の思想家の立場と世界観および人類の未来の運命についての展望の相違は、一九世紀ヨーロッパにおけるナショナリズムとインターナショナルナリズムを理解する上で、きわめて重大な問題を投げかけている。

この相違の根本的な原因は、無知による誤解といたったようなものではない。なるほど一見したところでは、すくなくともミシュレに関しては無知がかなり大きな役割を果していたように見える。事実、ミシュレがロシアについて得た知識は、ドイツ人ハクストイゼン、フランス人キユステインやその他五、六の著者たちに負う貧しいものであった。しかしミシュレは、ゲルツェンを知ったのちも、自己の著作を廃棄することはもちろん、それを書き直すこともあえてしてはいない。ゲルツェンも同様である。そして無知による誤謬を訂正することはそう困難なことではない。ミシュレはゲルツェンの著書を読むことによって直ちに自己のロシア認識の誤りを反省することができた。そしてロシア民衆の苦しみと新しいロシアのためにたたかっている人びとの存在を知ったとき、かれはかれらに深い同情をおぼえた。しかしその同情はついに同情以上にはでられなかった。かれはロシア民衆の立場に立つことはついにできなかった。他方ゲルツェンもまた西ヨーロッパの労働者の立場を自己

の立場とすることはできなかった。それができていたとすれば、かれのあのような形での絶望と、「精神的破産」はあり得なかつたであろう。しかも他方では二人ともにそれぞれの祖国の民衆に絶望することはなかつたのである。ミシュレは依然としてフランスの農民と労働者たちに希望を托していたし、ゲルツェンはロシアの百姓とかれらの共産主義的道德に期待し、そこにロシアの未来があると夢想した。ところでフランスの農民は例の分割地農民であり、ロシアの百姓はあの農村共同体オプンチナに結びつけられた農民であった。したがって二人の相違は、何よりも先ず、フランスとロシアの歴史的條件の相違そのものと、二人の歴史観や社会観の相違に求められるべきであろう。

『民衆』という書物のなかで、「フランスはフランス以外に頼るべき味方をもたない」と叫んで民衆の自覚と奮起を訴えていた一八四六年のミシュレにとっては、なによりもフランスの危機が問題であった。そしてこの危機の内部的要因を社会諸階級の分裂と対立のなかに見たかれは、民衆の本能的な知恵と力、かれらの自己犠牲と友愛の精神に信頼しつつ諸階級の和解を呼びかけ、そのための現実的な手段としてまず知識人・学生と民衆の同盟を提唱し、これによって危機を克服しフランスの統一を回復することを希望し、かつその可能性を信じていた。「一つの民族！一つの祖国！一つのフランス！」これが、当時のミシュレのスローガンであった。そしてかれは二月革命を予感し、パリの革命をコレージュ・ド・フランスの講壇にお

いて準備し、革命に積極的に参加した。しかしかれの期待は根柢からくつがえされた。

ミシュレは、革命と革命の敗北の過程を通して、階級対立の深刻さにうちのめされ、かれが無条件の信頼を寄せていた民衆の一部が「ナポレオン万歳！」と叫ぶのをきいてはげしい幻滅を味わった。民衆と民族の調和の一致の夢はくだかれ、民衆の本能への信仰はくずれさった。この苦い体験はかれの思想の微妙な、だが重大な変化を結果した。かれは階級闘争の歴史的不可避性をますます明瞭に認識するようになる。一八四六年の『民衆』のなかでは、階級分裂はフランス革命後の、歴史的必然性をもたぬ過渡的な一時的な現象にすぎないと力説していたが、四八年以後においては、たとえば『ルネサンス史』のなかですでに、ルネサンス時代にも前期的商業ブルジョワジーと労働者職人との階級対立があらわれていることを目ざとく指摘してみせるのである。こうしてかれは、けっして社会主義者になることはなかったとしても、社会主義に接近し、バクレーンやゲルツェンと友情を結び、ブルードンをくり返し読むようになる。そして一八五五年頃には、いわゆる社会主義を物質的な宿命論的社会主義と呼び、これにたいして自己の、意志の、精神の社会主義を対置させるところまでは進んでいるのである。

他方一八四八年の革命はたんにフランスのみの革命ではなかった。四八年の革命的運動は、イギリスのチャーチスト運動をも視野のなかに入れるとすれば、ヨーロッパのほとんどすべて

をおおったのである。革命は一つの、複雑につながりあうヨーロッパ革命であったともいえる。したがって革命の敗北は、ヨーロッパの危機、全ヨーロッパ民衆の危機を意味するものとなった。しかも二月革命の成果を横どりし労働者階級にたいする残酷な断片者と交じて、ロシア皇帝ニコライ一世から祝辞を送られたフランス・ブルジョワジーとその政府は、やがて国際的にも反動勢力の共犯者の役割を演じはじめ、一八四九年にはローマ共和国を圧制するために軍隊を送り、ローマ法皇の専制政治を復活させたのである。これはフランス国民にたいする裏切りであったのみでなく、パリの革命に勇気づけられフランスの援助を当てにしていたイタリア、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア等の諸国民にたいする手ひどい裏切りでもあった。ミシュレは、口惜しさと同情の入りまじった苦い複雑な気持ちでそれを目撃しなければならなかったはずである。それが『民主主義伝説』を執筆させた衝動であった。それだけに、ヨーロッパは巨大な牢獄と化してしまっただけで、もったいぶった偽善的な正義の見せかけだけはあるけれども実質的には正義と自由の一とかげらさえるヨーロッパには存しないというゲルツェンの激烈な批判はかれの胸を鋭く刺し貫いたのである。かれは、『民主主義伝説』のある註のなかで、ゲルツェンはたんにロシアを断罪しているだけでなくフランスとヨーロッパをも断罪しているのだ、と記している。こうしてかれは、二月革命を契機として、かつての頑固なまでに強固であったフランス中心主義的な文化的中華意識から少しずつ脱却しはじめ、世界におけるフラ

ンスの客観的な役割を冷静に批判し得る目をもちはじめると同時に、民衆的な国際連帯の精神を強めてゆく。たとえば『伝説』のなかですでにこれは次のように述べている。

「かつての司教座ローマは卑しむべきものに墮落し、教皇はいまではイタリアの小君主として振舞う以外のことは考えていない。

現時の司教座フランスは、そのイギリス追隨の産業主義とブルジョワ的忠誠の下に自己を忘れてしまった。」

また長い間のイギリスにたいする憎悪も徐々にうすらぎ、一八七一年の『ヨーロッパの前のフランス』においては、ナポレオンの・プロイセンの軍国主義の原理にたいして、イギリスとフランスの労働と産業の原理を対置させるにいたる。

こうして二月革命を契機として、ナシヨナリズムの立場から出発したミシュレは、いわば社会主義とナシヨナリズムとインターナシヨナリズムの結節点に立つことになったのである。そうした発展の主軸となったものは、民衆の理念、民衆への愛であったし、また搾取と被搾取、支配と被支配、抑圧と被抑圧という矛盾の諸関係そのものを通じてますます緊密に一体化しつつあった世界史の現実そのものが、かかる変化を要求したのであらう。

ゲルツェンは、一八四八年が提示した問題にたいしてミシュレとは逆の立場から接近していった。かれは、人類共通の理想としての社会主義の実現を期待して革命を熱狂的に歓迎した。

その夢が打ち砕かれたときかれの社会主義は、楽天的な調子を失なって悲劇的な相貌をとりはじめた。一八五一年にはすでにかれは社会主義を何よりも「現代社会の崩壊の意識」としてとらえている。あまりにも多くの、あまりにも大きなロシアの苦悩を背負っていたゲルツェンは、その苦しみの重さとその希望の高さとの故に、ブルジョワ革命のもたらした進歩性に満足することはできなかつたのである。かれは、西ヨーロッパのいわゆる文明と進歩の偽善性と形式性の下にかくされている新しい鉄鎖を見出したのである。

「あなたがたの法律とツァーリの勅令とのあいだのちがいは主として前文の標題にあることをわれわれははっきりと知っている。勅令は『ツァーリは命じ給えり』という圧倒するような真実さをもつてはじまる。あなたがたの法律は、共和制の三つの標語『自由・平等・博愛』とフランス人民の名を皮肉にも冒頭に採用するという不快至極な虚偽をもつてはじまる。ニコライの法典は国民に反対して權威の利益をきっぱりと擁護している。だがナポレオン法典もまったく同じ性格をもっているといふ。かわれわれには思えない。われわれが自発的な選択にもとづいて新しい鎖をよけいに身にまとうには、われわれはすでに、力づくで強いられたあまりにも多くの鎖を引きずっているのだ。」

ゲルツェンは西ヨーロッパに幻滅を感じた。というよりもむしろ、ロシアが西ヨーロッパの道を追いかけることによって、古い露骨で野蛮な桎梏をかなぐり棄てることかたえできるとしても、しかし西ヨーロッパと同様に、そのときには偽善的な

装いの下に新しい鎖を身につけることになるのだと考えたのであり、そうした見通しに我慢できなかったのである。西ヨーロッパは止むを得ない、しかしロシアは同じ道をたどってはならない、なぜならヨーロッパの歴史はすでに「反共同体的文明が自己の原則をもってしては個人の権利と社会の権利とのあいだの矛盾からぬけ出ることが絶対に不可能だ」ということを証明したのであるから、とゲルツェンは考える。当然のことながら、かれはヨーロッパのプロレタリアに責任を負っていたのではなく、ロシアの民衆に責任を負っていたのである。かれはロシアにおける農村共同体の健在を喜び、そこにロシアにおける社会主義の未来を賭けるのである。ここからかれはスラヴ的社会主義とも呼び得るあのナロードニチエストヴォの理論を先取することになる。こうしてゲルツェンもまた、社会主義から出

発して、社会主義とナショナリズムとインターナシヨナリズムの結節点に立つことになったのである。そしてかれは社会主義革命の方法の普遍性を拒否して、その民族的な独自の道を主張する。

以上は問題の提示にすぎない。問題の分析は次稿において行ないたいと考える。

(紙数の関係で、用意していた註はすべて割愛しなければならなかった。ただ、引用したミシュレの文章は、主として一八九三年と一九九年刊行の全集版によったこと、ゲルツェンのそれはモスクワ外文出版社の哲学選集フランス語版に主としてよったことだけをお断りしておく。)

(一橋大学大学院学生)